

# 宇宙からの贈物

A gift from outer space



# 宇宙からの贈物

- ミュオグラフィアート展 -

## 目次

1. ご挨拶（林武文）	1
2. ミュオグラフィ（田中宏幸）	2
3. 科学そしてミュオグラフィアート（中島裕司）	3
4. ミュオグラフィの誕生と活動について（角谷賢二）	4
5. 水墨画とルミアートとミュオグラフィ（向山和子）	5
6. 沢野の開拓「宇宙からの贈り物 ミュオグラフィアート展」に寄せて（淵田雄）	
	6
7. ミュオグラフィアート作品	
中島裕司	7
向山和子	8
Sara Steigerwald	9
澤田利光	10
松田美津雄	11
Hiro	12
西田マコ	13
橋本浩子	14
林ゆかり	15
堀井文夫	16
谷村暎子	17
北川清仁	18
中島幸佑	19
早瀬ゆりあ	20
角谷華仙	21
もりともえ	22
畠美沙樹	23
仁司朋花	24
村岡あづ美	25
大曾初音	26
大塚晴乃	27
小阪美咲	28
西口桃	29

## ご挨拶

ミュオグラフィアートプロジェクトリーダ  
関西大学総合情報学部教授 林 武文

サイエンスアートは、芸術作品によって最新の科学に対するイメージを鑑賞者に与えるものであり、科学に対する興味や関心を喚起するとともに、未来への展望や科学が抱える諸問題を伝えるメッセージ機能を有しています。近年では、最新の科学分野に対して様々な形態のサイエンスアートが提案されており、日本だけでなく欧米の先進国でも注目されています。このようなサイエンスアートの重要性に気が付き、関西大学総合情報学部にミュオグラフィアートプロジェクトを2017年4月に立ち上げ、1年以上が経過しました。

サイエンスアートといつても分野は多岐にわたります。私どもは科学シーズとして日本が世界に誇れる東京大学田中宏幸教授の最先端透視技術ミュオグラフィを取り上げ、3次元コンピュータグラフィックスによる可視化、映像の音響化とインスタレーション、人間の視覚認知研究に基づく3次元錯視表現など情報学分野の研究成果や表現技術を用いて、新たなサイエンスアート表現を創生し発信しています。

しかし、学内のみでの取り組みだけでは多くの方々にご理解いただくには限界があります。そこで、学外の絵画の専門家、デザインの専門家の方々の力をお借りして、学生たちにも参加と協力をお願いし、多くの方々とミュオグラフィアートを盛り上げて行きたいと思っています。今回の「宇宙からの贈物」茶臼山ミュオグラフィアート展は、中島裕司博士および角谷賢二博士のご尽力でまさにこの意向を取り入れていただいた展示会となり、大変喜ばしく思います。参加していただいたプロのアーティストは、絵画、日本画、デジタルアート、陶芸、京鹿の子絞、ディンプルアート、抽象画アート、ミクストメディア、デリカ・ビーズ、詩、アールブリュット、書、ミュオグラフィ・クッキーなど多彩な分野の方々で、関西大学の学生たちと高校生も絵画で参加してくれています。

東京大学地震研究所の科学技術であるミュオグラフィをシーズに、関西大学総合情報学部の情報系の研究者、プロのアーティスト、学生たちとの連携が実りつつあり、今後もミュオグラフィアートがさらなる発展を遂げることを望んでいます。

# ミュオグラフィ

東京大学地震研究所教授 田中宏幸

2006年、ミュオグラフィによって私たちは新たな想像の機会を得た。火山内部の透視画像が世界で初めて撮影されたのである。銀河系の彼方から何千万年もかけて地球に到着する粒子が、ミュオンを作る。キロメートルにも及ぶ岩盤を通り抜けるミュオンは今も私たちの体を通り抜けている。その数は一晩寝ている間に百万個以上。この強い透過力を使って火山、ピラミッドなどの巨大物体を透視する新技術が「ミュオグラフィ」である。

1895年、物理学者ヴィルヘルム・レントゲンはX線を発見した。彼はその直後にレントゲン写真撮影法を発明する。エックス線の一部が物体内部で止まることを利用して、その影を映し出すのだ。これはミュオグラフィの原理と同じだ。すでに当時、解剖学的な知見から人体内部の構造は広く知られていたため、レントゲン夫人の手の透視写真は難なく人に受け入れられた。だが、人々を驚嘆させたのは骨の写真そのものではなく、物体を透過できるという新事実である。そして百十一年後の2006年、X線の代わりにミュオンを使えば、地球内部を透視できることが分かった。

私たちは複数の経験を組み合わせることで概念を組み立てる能力を持っている。科学的か芸術的かを問わず、この過程で、私たちは五感のみでは認められないものも補っている。そのため、想像の産物は十人十色である（概念の多様性）。だが、この多様性は実証により収束する（概念の収束）。そしてこの収束した概念をベースに、人々は再び新たな概念を組み立てようとする（概念の多様化）。

世界観を一例として挙げよう。古代ギリシャでは「円盤の周囲を海神オケアノスが周囲している」という世界観が人々の常識であった。だが、中国やインドの世界観では、「オケアノス」の存在は仮定していない。つまり、ここに想像の多様性がある。ところが十六世紀、測量技術が発展すると「世界地図」が人類共通の認識となる。このように人々の想像の多様性は新たな事実の発見により失われるが、今度は「世界地図」から「宇宙地図」へと「概念の多様化」が始まる。

一度、人類が地球を透視する能力を持ち合わせていることが分かると、新たな「概念の収束」が始まる。十七世紀の科学者であり、画家でもあったアタナシウス・キルヒャーは絵画「地下世界」の中で地球内部を描いている。だが、地下世界はキルヒャーだけに想像されたわけではない。ローマ神話に登場する火の神ヴァルカンはエトナ火山の下に冶金場を持つと信じられていた。この多様性に一定の収束を与えるのがミュオグラフィである。そして、それが新たな「概念の多様化」の始まりとなる。これには多様な芸術的創造活動も含まれる。例えば今、ミュオグラフィアートという新たな学際領域が作り出されつつある。ミュオグラフィの観測限界を超えて描いた二十一世紀版「地下世界」は将来の新たな科学技術の出現により再び、「概念の収束」へつながっていくことだろう。

# 科学そしてミュオグラフィアート

日本美術家連盟 博士(芸術制作) 中島裕司

「アート・芸術とは何か?」の根本問題は、人類始まって以来の永遠の課題であり、解決はないだろうし、それがアートのdiversityであり、それはそれでいいのであって、ミュオグラフィアートに関しても突き詰めれば非常に難しい問題であるが、ごく一般的は言い方をすれば、「ミュオグラフィに対してアートが何ができるか、またアートはミュオグラフィから何を触発されて今後につながるか?」であろう。その点を踏まえて、アートにはいろいろな面があるが、アートの一つの力として、一般大衆にはわかりにくい事象や見えないも事象を、感動をもって、わかりやすくする力がある。 例えば、科学のデータで数値化されたものは、専門家にはわかるであろうが、専門外の人間にとっては、まったくわからないし、面白くもないはずである。ところが、絵画等アートを通して、難しい事象が一般大衆にもよくわかり、しかも感動が伴うと、難しい科学も身近なものと感じられて、大変意義深いことであると思う。今まででは、アートによる、見えないものの可視化というものはあまり取り上げられなかつたが、今後、科学等難しいと思われていたものは、身边に感じることによってわかりやすくなり、さらに小学生・中学生や高校生等若い世代にとって、最近進んでいる科学離れに歯止めがかかるようになると思う。科学とアートは全く別の分野であり、何の関連性もないと思われていたのであるが、よく考えると、二つの分野は、根源的な部分では同じであるような感じもある。

芸術家は目には見えない心の中にあるものをいろいろな媒体を使って、表現する。一方科学も見えるものあるいは見えない現象の原因やメカニズム想像し、発見して、具現化する。難しい科学もアートも根源は同じであり、両者の相互作用によって、一般の人が興味を持つようになることは大切である。そうぞう(想像)からそぞう(創造)である。科学は想像から出発して新技術を発明して人類に貢献する。アートも想像からエネルギーを得て創造することで、人に喜びや感動を与える。アートも科学を使い表現の幅が拡がり、科学もアートでさらに興味を持つようになり、一般大衆は興味を持ち、人類に貢献することは望ましい。

ミュオグラフィは、まだ聞きなれない科学の言葉である。大まかな言い方をすれば、巨大物体のレントゲンのようなものである。火山の内部は直接見ることは不可能であるが、ミュオンを使った技術で内部を数値的に内部の状態が分かる。一方ミュオグラフィアートはデータをもとに内部を想像して制作するアートである。エックス線という言葉やどういうものであるかは、ほとんどすべての人が知っている。一方、ミュオグラフィはほとんど知られていないが、巨大物体のX線と同じ原理であり、人類の幸福や生存にとって、不可欠なものとなるであろう。ミュオグラフィアートは、ミュオグラフィという難しい透視技術がだれにでも親しみを持てるようにするアート表現である。

# ミュオグラフィアートの誕生と活動について

国際美術研究所 所長 元関西大学学長室シニアURA 角谷賢二

サイエンス&アートを介してミュオグラフィの原理から観測限界までの正しい理解を専門家以外の方々に伝えるというミュオグラフィアートの活動を正式に始めて1年以上が経過した。

2016年秋、イタリアの科学者Paolo Strolin教授からサイエンスアートの共同推進の話があり、東京大学の田中宏幸教授の提案でミュオグラフィをモティーフにサイエンスアートを進めることにした。母体となる拠点を関西大学総合情報学部に置き、プロジェクトの名前を「ミュオグラフィアートプロジェクト」とした。総合情報学部林武文教授の専門である3D-コンピュータグラフィックス(CG)、ノーマンD. クック教授の3D-逆遠近錯視(3Dイリュージョン)、井浦崇准教授の絵画等を音響化する技術(サウンド・インスタレーション)と融合して、ミュオグラフィをベースとした新たなサイエンスアート表現を創生し発信することにした。学外の絵画の専門家、デザインの専門家の方々の力もお借りした。その一人が中島裕司画家である。彼は薩摩硫黄島のミュオグラフィを油絵、パステルなどで表現した。その数は30点以上に及ぶ。今ではミュオグラフィアートの第一人者と言っても過言ではない。また、Sara Steigerwald アーティストも仲間に加わっていただいた。Saraアーティストは、ミュオンを中心とした物理現象をパソコンのみで表現するデジタルアーティストである。さらに関西大学の学生7名が賛同してくれ、油絵によるミュオグラフィアートの制作にとりかかった。ミュオンの物理的挙動を表現したもの、解析方法を表現したもの、古墳やピラミッドなどのミュオグラフィの測定対象物を表現したものなど多彩である。

2017年度は、6月に田中宏幸教授、中島裕司博士の講演会を、9月に林武文教授、田中宏幸教授の講演会を開催した。また9月にグランフロント大阪ナレッジキャピタルでのミュオグラフィアートを一挙公開した。これらのイベントを通して約2万人の方々がミュオグラフィアートに触れたことになる。また、ミュオグラフィアートプロジェクトのホームページ(<http://wps.itc.kansai-u.ac.jp/ku-map/>)やFacebookも開設し、多くの方々にミュオグラフィとそのアートを知っていただくことに努めた。

そして、2018年度は、4月のグランフロント大阪のナレッジキャピタル大学校の宇宙HACKでの展示を皮切りに多くの展示会を計画した。5月、岡山拠点の国際美術研究所(東方美術館)でのゴールデンウイーク企画展示。5月から6月にかけて多摩美術大学美術館で同大学のアーティストと共に「宇宙(そら)に訊(たず)ねよ」と題した展示会と講演会。さらに、中島裕司博士のご尽力で油絵以外に、日本画、デジタルアート、陶芸、京鹿の子絞、ディンプルアート、抽象画、水彩画、書道、色彩ペン画、ミュオグラフィックキーなど多くのアーティストがミュオグラフィアートに挑戦することになった。この方々の作品を7月に大阪の茶臼山画廊で展示。9月には、兵庫県政150周年記念事業で「国際現代」水墨画協会とミュオグラフィアートとのコラボレーション展示を行う。その後も科学館、博物館での展示会をプラン中である。優れたサイエンスアートを社会に発信することにより、多くの若者がサイエンスの興味を持ち、優秀な学生がサイエンスの分野に入ってきていただきたいと願っている。

# 水墨画とルミアートとミュオグラフィ

「国際現代」水墨画協会会長 日本画家 向山和子

私は絵描きです。ミューオンやミュオグラフィについては、物理学者にお任せします。

2015年11月、この年は「国際光年」でユネスコ主催の「世界科学フォーラム」には、100ヶ國900人の科学者がブダペストに集まった。世界的有名なアッチラ氏の「ホノグラフィー」と私の「ルミアート」が光の芸術としてこの会議の展示物に選ばれた。

日本からはノーベル物理学賞受賞者の天野 浩名大教授が講演者として、他10名の先生が参加されていた。「ルミアート」を見て、「今後のサイエンスにはアートを加える必要がある」と口ぐちに話された。私はその5年も前からLEDを使い、「科学とアートの融合」した絵画をコツコツと制作し、発表時にはロシアの作曲家スクリャービンの曲を会場に流した。

1995年の阪神淡路大震災で自宅全壊し、仮住まいの家で、山の絵を岳シリーズとして連作していた。それは胸中にある山で、現実世界の山では無かったが、見る人は「この絵はキリストの殉教したシナイ山だ、私は登ってきました」、「自分の故郷の山だ」、「中國の雲南省の山だ」とか「この絵の前に立つと風が吹いて来た」、「この絵を見ていると泪が溢れます」、また抽象画では「あなたの絵の前まで来た時、急に地球の回転する音が聞こえてきた」「生きていく強い力を貰った」などと、描いた人間を超えて、見る人々一人一人に応答する何かが絵から産み出されていた。海外の個展でも絵は言語を超えて見る人たちに感動を与え作者の私と心を共有した。「アート」は個を超えて大勢の人の心と共にあることを実感した。

2018年9月のミュオグラフィ・アートプロジェクトと水墨画のコラボ展でのポスターの絵「映」（螺旋階段）は2005年に制作した作品。それ以前から「螺旋」に惹かれ、「螺旋シリーズ」を始めるも、所属していた団体のボスに理由もなく拒絶され、中断のまま。

自著の中で「ハンガリーは第二の故郷」と書くほど、40年来の濃いお付き合いです。ハンガリー科学アカデミーのウイグナー物理研究所ペーター・リーバイス所長とは神戸でもブダペストでも、以前から交流があり、私に会えば研究に無関係な個人的話題で盛り上がっていた。

2017年ミュオグラフィの話を聞いた時「日本の東大とハンガリーのペーターの研究所と？」と人の繋がりに驚きつつ、ハンガリーとの関係ならと、「ミュオグラフィ・アートプロジェクト」に参加することになりました。

# 沃野の開拓

## 「宇宙からの贈り物 ミュオグラフィアート展」に寄せて

多摩美術大学美術館 学芸員 淵田雄

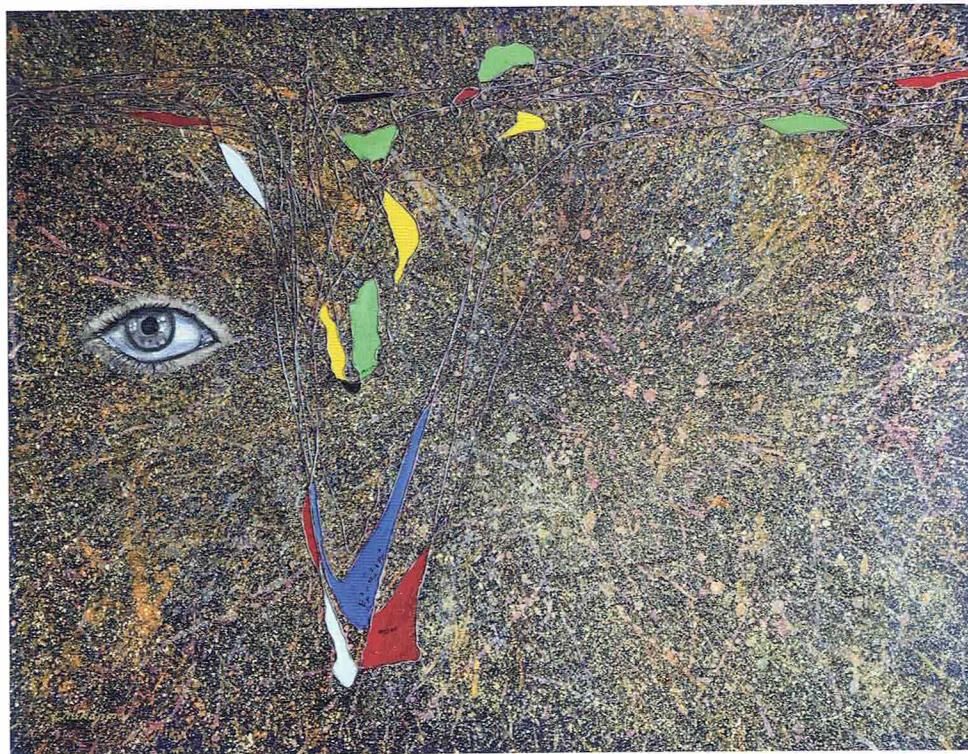
火山やビル、ピラミッドなど巨大物体を透かし見る技術「ミュオグラフィ」。それは遙か1000万年の旅で地球に届いた宇宙線と、大気で生まれる素粒子「ミュオン」を観測する先端サイエンスである。ミュオンは絶え間なく降り注ぎ、我々が寝ている間に体を通過する数は実に100万個。高エネルギーかつスピードは光速だが、生まれてから存在できるのは僅か100万分の2秒間のこと。瞬時にミュオンは物質・物体を透過する。

ミュオンは決して目視する事は出来ない。ミュオグラフィが観測してきた火山やピラミッドなどの内側もまた然りだ。しかしみュオグラフィがこれらを可視化することで生まれた“見る”体験はサイエンス領域ならではの新鮮な驚きを以て世の中に迎えられた。さらに「ミュオグラフィとは?」の問い合わせを投げかける時、そこには透視という目的やテクノロジーと並列しながらも、感性の領域に通じるベクトルが我々の知覚を揺さぶり始めている。

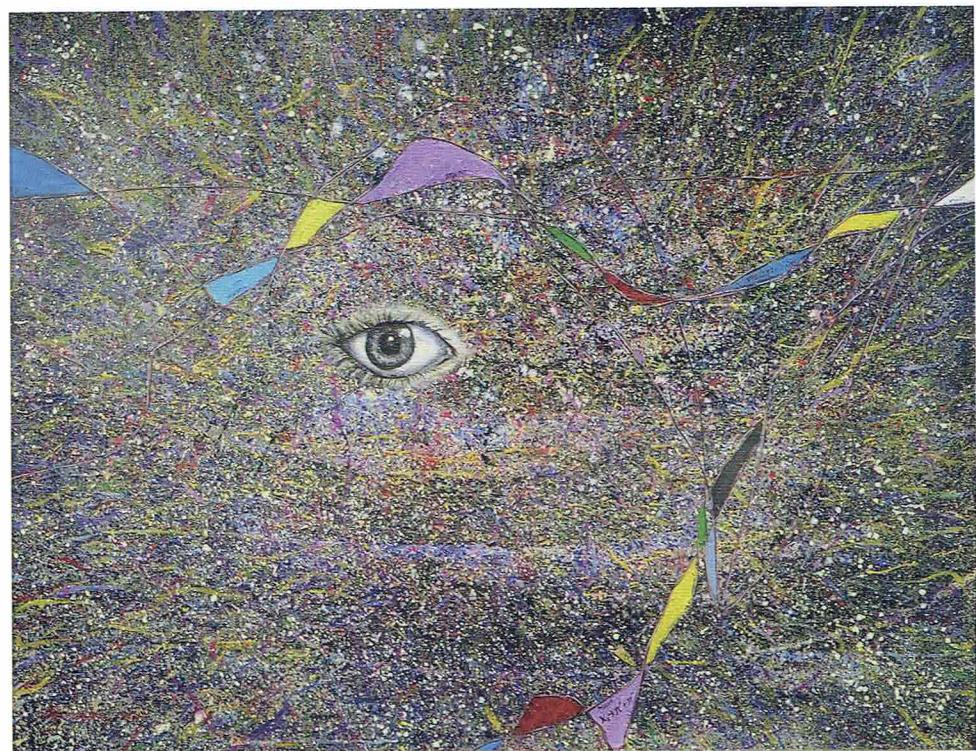
「巨・微」「遙・瞬」という相反の渾然から生じる機微・隠された存在への気づき・目に見えない何者かを可視化することへの渴望・時空や現在の認知を超えるしくは遡り未知の現象や姿に触れる感覚。これら思索的とも言える諸相へのアプローチはミュオグラフィが導く人文分野との親和性や発展性を示唆しているよう。

また広義にサイエンスを目指す姿勢の根源に「感性を揺さぶる」ものがあり「創造的行為」あるとすれば、それは太古から宇宙や自然そして人間を問う続けると共に、人類の基盤でありながら「不可視」である感情・感性・思想・観念・宗教を表象してきた芸術とも営為を共有しているのではないか。ルネサンス期、技術と芸術が共に「創造」の産物として「ART」として理解されたことはまさに注目すべき事実であると共に、AINシュタインの言葉「私たちが体験しうる最も美しいものとは、神秘。これが眞の科学の源」、「感動することをやめた人は、生きていのと同じ」はまさに芸術と科学の根源的関係を伝えていに違ひあるまい。

そして近年、芸術とサイエンスの新たな出会いとなるミュオグラフィアートが提示され、未知への誘惑と創造の地平が開かれている。ミュオグラフィとの触発を表現する芸術家達が北米やヨーロッパ諸国に生まれ、日本でもその胎動が始まった。関西大学で発足した「関西大学Muography Art Project」を嚆矢とし、大阪グランフロントでの野心的な展示や多摩美術大学美術館での『宇宙(そら)に訊ねよ』展さらに関西圏を中心としたアクティブな状況が生まれていることはここに言うまでも無い。そして今、ミュオグラフィアートの新たな時を刻む本展が開催される。ミュオグラフィの世界観と芸術家との新たな感性が触発し、人類が目指す新たな沃野が開拓されることを期待したい。



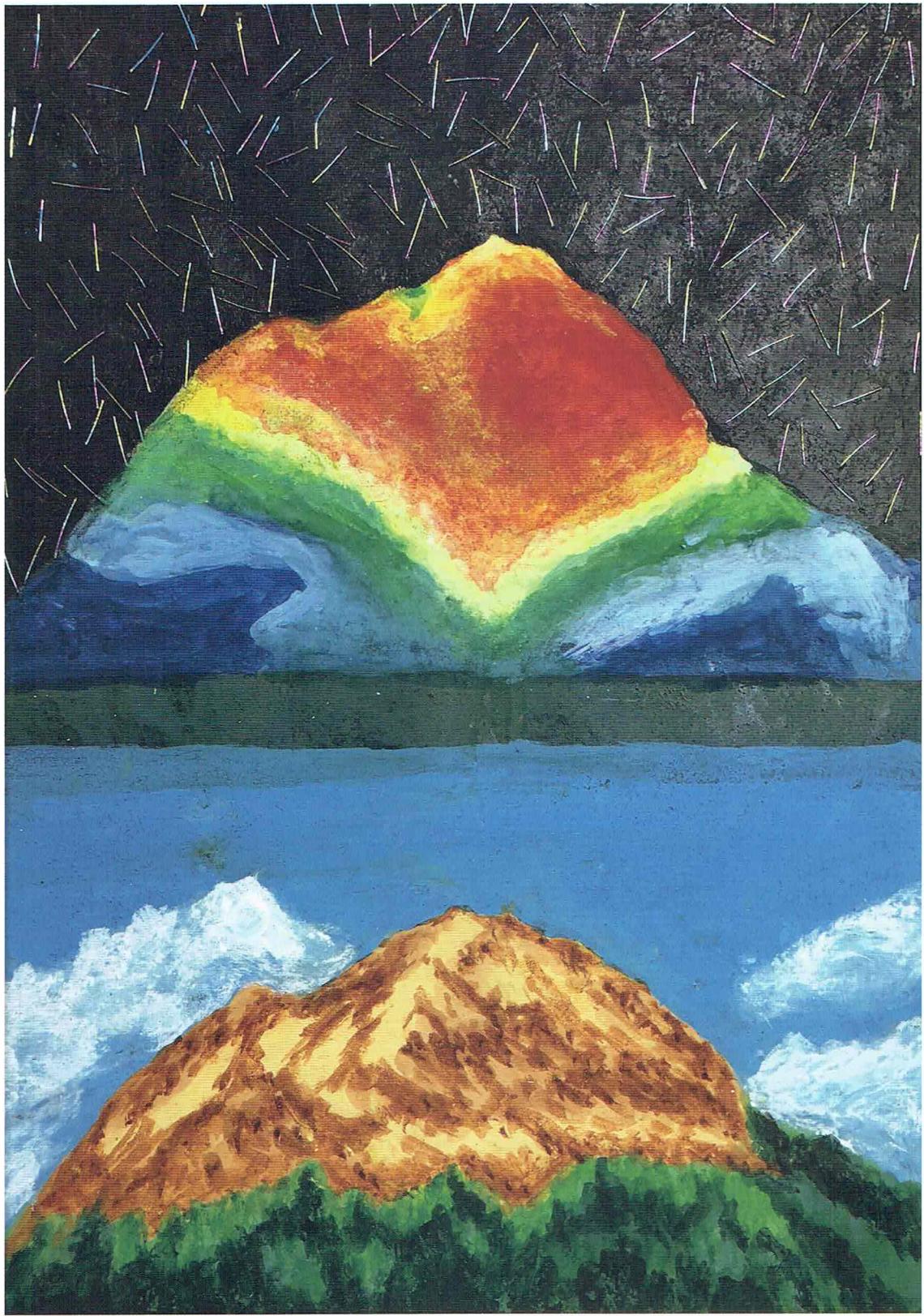
「ミュオンの目 I」 油彩画 / F50 H91.0cm×W116.7cm



「ミュオンの目 II」 油彩画 / F50 H91.0cm×W116.7cm

中島 裕司  
Hiroshi Nakajima

ミュオグラフィ・サイエンスとアート。そうぞう (imagination) からそうぞう (creation) へ。  
キーワードは、素粒子・宇宙・火山・透視・そして輝く未知の世界への旅である。



「昭和新山と透視図」 日本画 / M15 H65.5cm×W45.5cm

向山和子  
Kazuko Mukoyama

昭和新山は1943年～45年にかけて有珠山の麦畑の一部から溶岩が噴き出しできた火山です。私にとっては1980年代に二度も麓まで行った親しい山です。（東大地震研と名古屋大理学部の資料を参考しました）



「AMuonTravelsThroughMatter」 Digital Art



「GalacticCosmicRayPropagationinTime」 Digital Art

## Sara Steigerwald

### Artist Statement

With this new series of digital paintings, I want to communicate my feelings of wonder that have been rekindled as I have recently learned more about the relationship between Particle Physics and muography in particular. These muography paintings are the result of collaboration with Physicist Hiroyuki Tanaka and myself. Muography is an application of particle physics. It is an imaging technique that utilizes elementary particles called muons. This series presents muography as a visual story.

The art that I most admire is that which allows the audience to fill in many of the details with their own imaginations. It was our intention to strike a good balance between presenting the facts and data of muography and allowing enough ambiguity so that the audience may also construct their own interpretation.



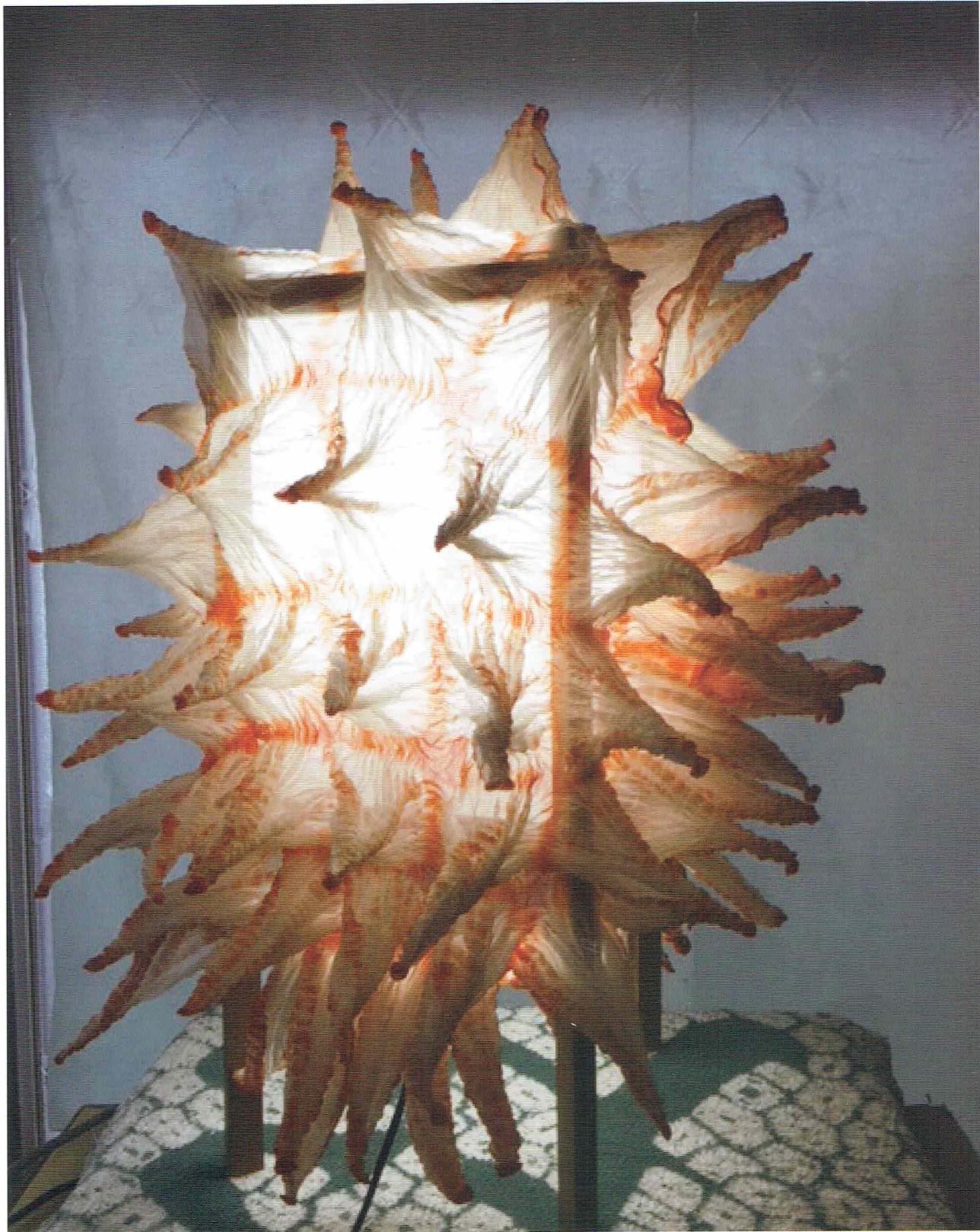
「諸のミュオグラフィ No.1」 陶芸 / H12.0cm×W23.0cm×D23.0cm



「諸のミュオグラフィ No.2」 陶芸 / H10.5cm×W19.0cm×D19.0cm

澤田利光  
Toshimitu Sawada

夜の渚にミュオンが降り注ぐイメージと、火山をイメージした作品を試みた。技術的に色粘土の象嵌によりミュオン（細い線の象嵌）と、マグマ（太い線及び群象嵌）を表現し、更に金液で線を描く事でミュオンに変化を付けた。



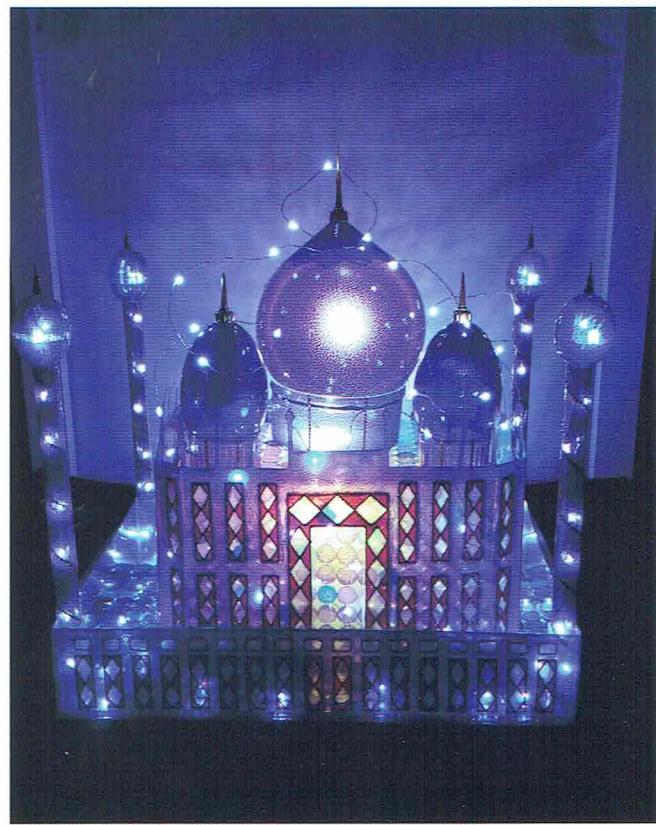
「未来の光」 京鹿の子絞 / H50.0cm×W20.0cm×D20.0cm

松田美津雄  
Mitsuo Matsuda

世界で最古の染色技法『絞』で最先端技術のミュオグラフィを表現してみたい!  
ミュー粒子が飛ぶ様子や、熱く今にも爆発しそうな地球の内部を感じ取れる様に仕上げました



「未来へ」 ディンプルアート / H70.0cm×W50.0cm



「光の宮殿」 立体

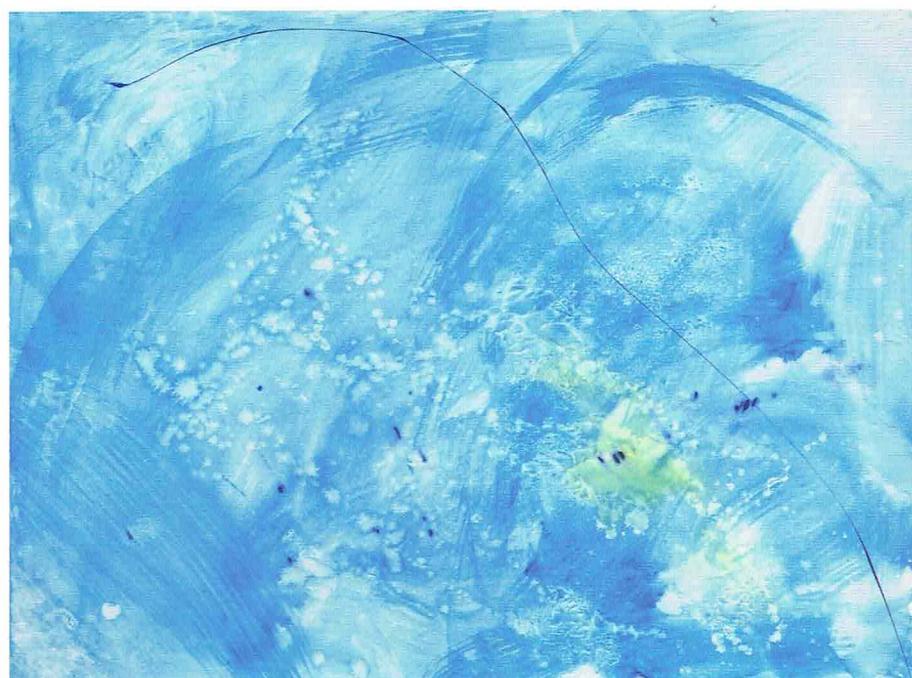
H i r o

ミュオンを蝶々にたとえ表現したわたしなりのミュオアート！どこかに「M・U・O・N」の文字が隠されています。それを見ついたらあなたにはどう見える？宇宙？火山？惑星？マグマ？間近でゆっくりご覧下さい！



意識って何だろう?  
どこから来るんだろう?  
地球の思い  
宇宙の思い

「Time Space (時空間) 12-36」  
/ H56.5cm×W75.5cm



全てのものに  
生かされて  
今、この地球に  
在ること  
生命のひびきあり

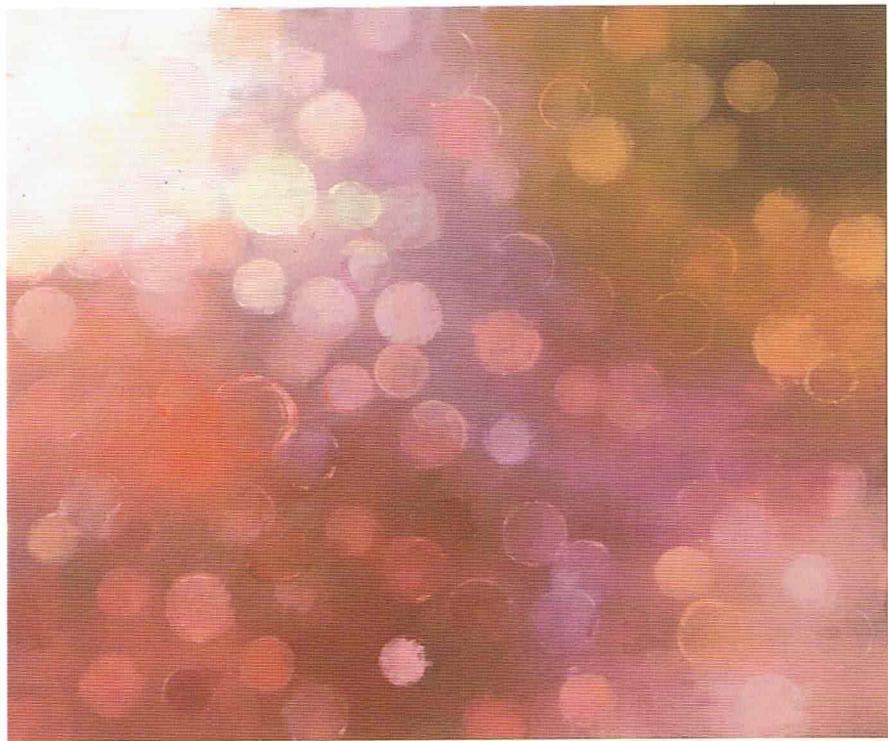
「Time Space (時空間) 12-37」  
/ H56.5cm×W75.5cm

西田マコ  
Mak o Nishida

地平線の向こう  
水平線の向こう  
銀河の向こう

いつもそこに在り続ける想いが、  
時間、空間、意識と 重なりあって  
1つの絵に 辿りつく。

その絵は、宇宙からやってきて、私を通り抜け、  
「時空の窓」となり、また 宇宙へと円を描く。



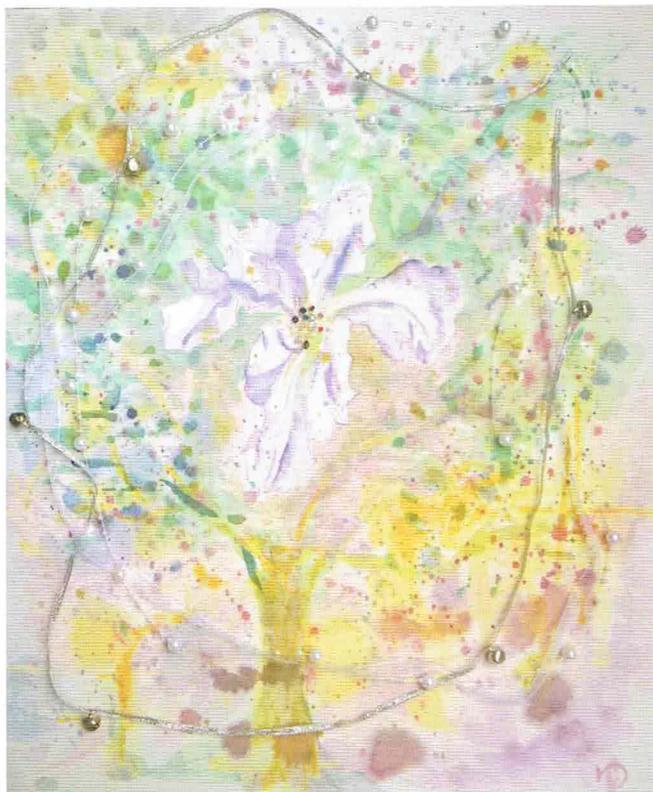
「光の粒」 油彩画 / F10 H45.5cm×W53.0cm



「車窓から見た流線」 油彩画 / P10 H41.0cm×W53.0cm

橋 本 浩 子  
Hiroko Hashimoto

宇宙から降り注ぐたくさんの粒子は、長い旅のあと、一瞬よりも短い命を地球で咲かせるそうです。  
それは、絵を描くことに少し似ていると思いました。



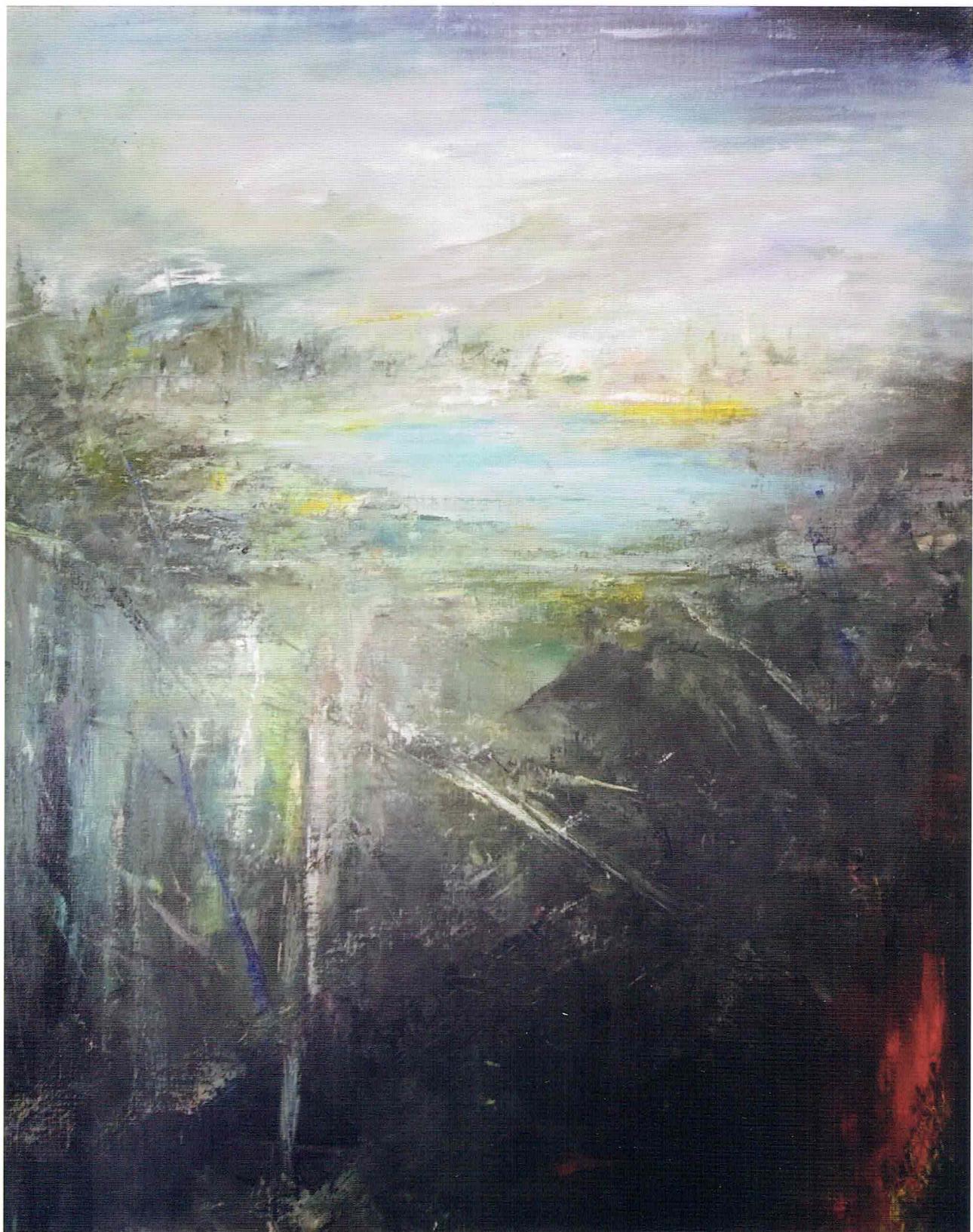
「命の痕跡/a sign of life」  
ミクストメディア / F8 H45.5cm×W38.0cm



「光と命のシンフォニー」  
ミクストメディア / F50 H116.7cm×W91.0cm

林 ゆ か り  
Yukari Hayashi

この宇宙がなぜ在るのか?どこへ繋がっているのか?私達はどこから来てどこへ行くのか?  
ミュオグラフィは、その疑問や命の根源をうつすらそして徐々に正確に浮き彫りにしてくれるあらゆる痕跡の息づかいを美しいハーモニーのように表現していると捉えました。



「ミュオン夢飛行」 油彩画 / F30 H91.0cm×W72.7cm

堀井文夫

Fumio Horii

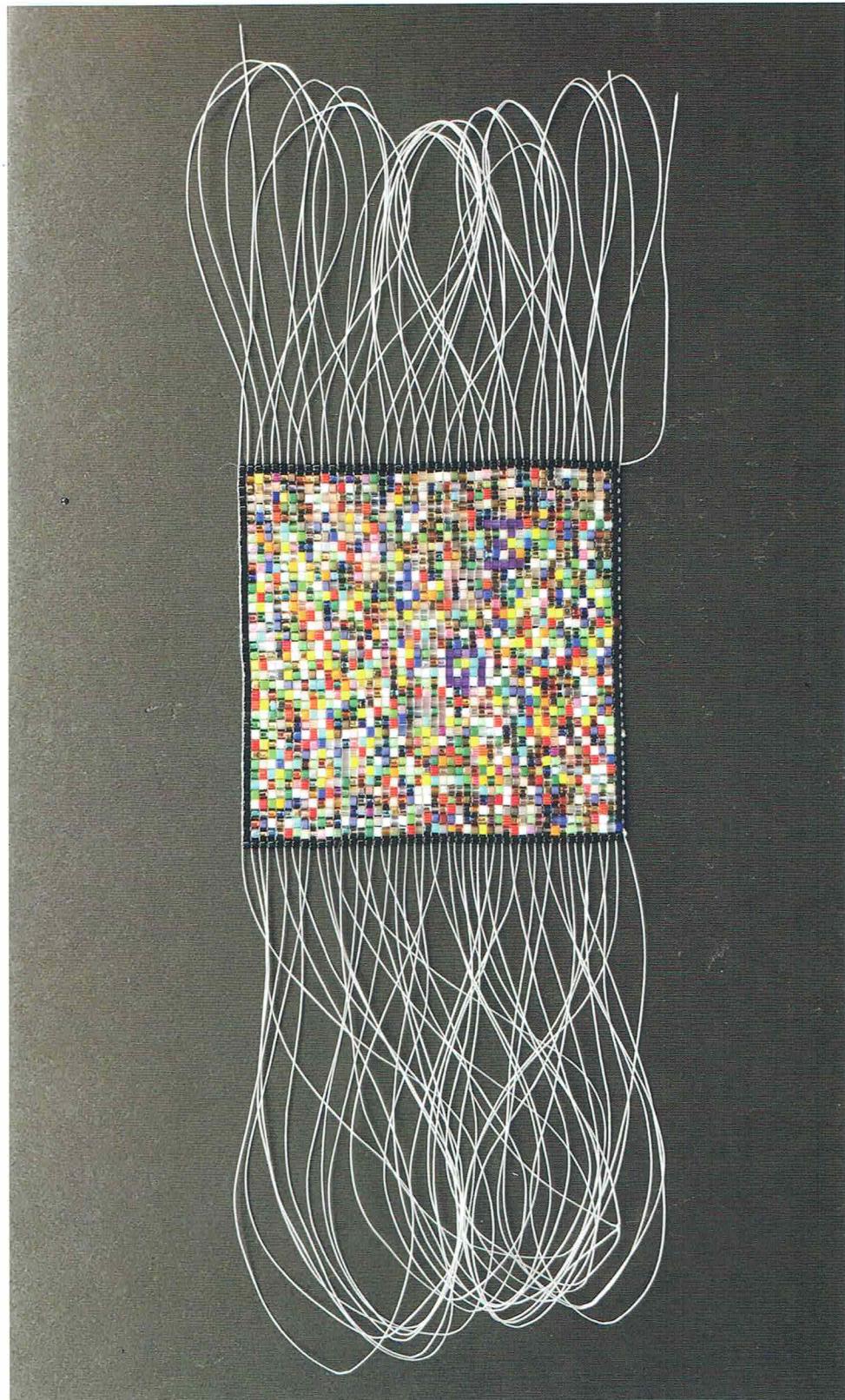
宇宙の何処かで生まれミュオンの旅は始まります。

それは、ゴールの定まらない永遠の飛行になるかもしれません。

しかし偶然にも地球を通過したら、ごく少数の粒子だけが到達点を見出せるかもしれません。

この作品は、宇宙から地球の核までを半抽象で表現しました。

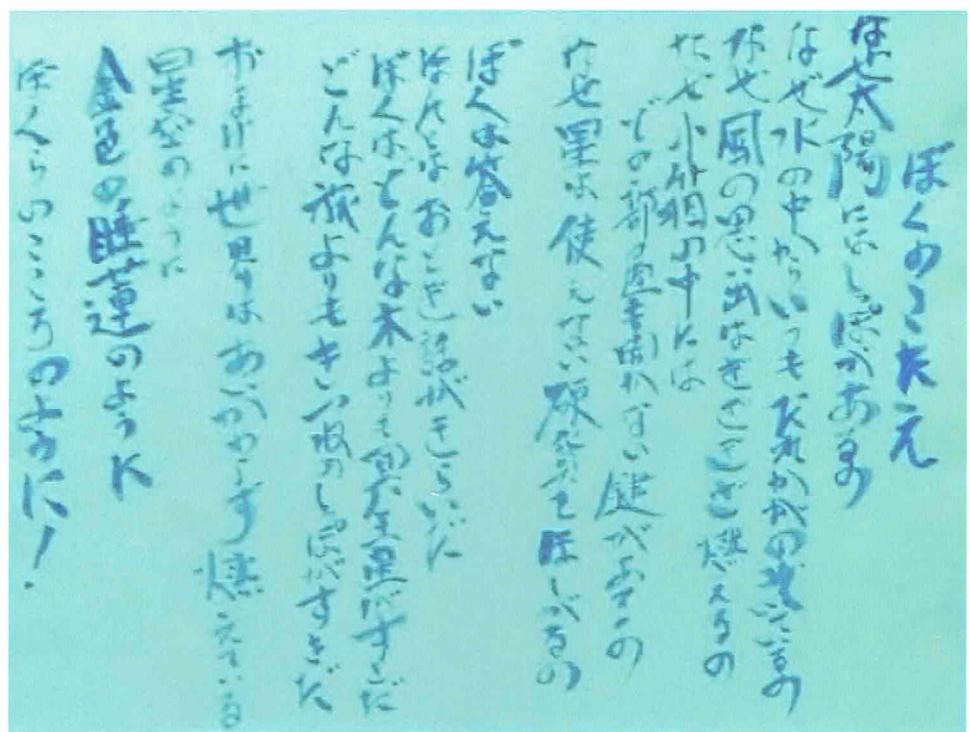
特にマグマを描き入れていますが、ミュオンの旅の終わりになるのでしょうか。



「ビーズで、ドットの世界へ」 デリカビーズ織り / H23.0cm×W6.5cm

谷 村 曜 子  
Eiko Tanimura

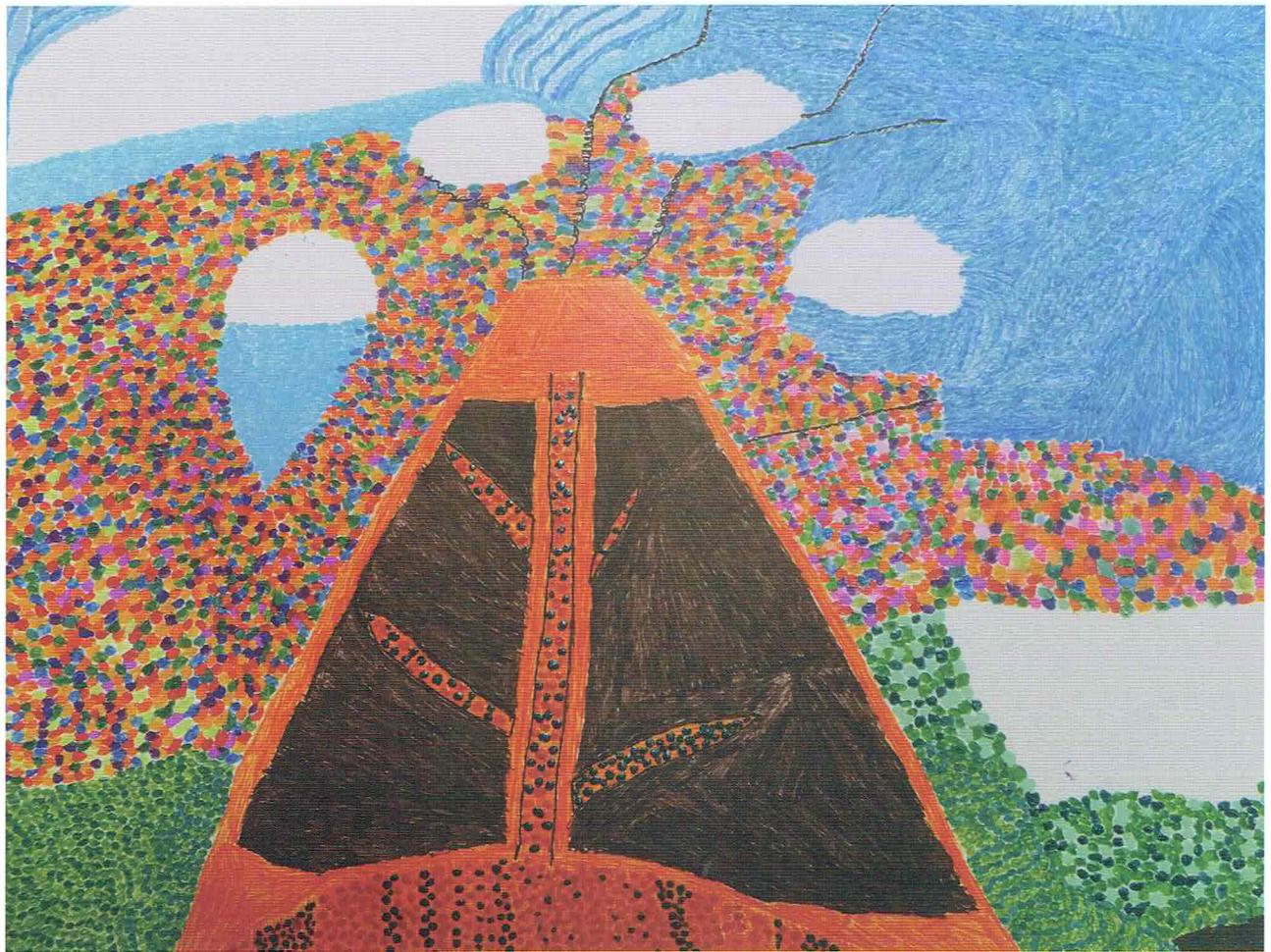
最先端の科学である《ミュオグラフィ》と、前近代的な手作業の《デリカビーズ織り》は、アートとの融合。煌びやかなビーズは、素粒子である。そのビーズでの縦横の格子の構築は科学とアートが相互に光を謝した瞬間である。



北川清仁

スフィンクスのはらわた あるいは出口のない迷路に ようこそようこそ わからないことの快感

Kiyohito Kitagawa



「エネルギー!!」 色彩ペン画 / H24.2cm×W33.3cm

中島 幸佑  
Kosuke Nakajima

ミュオグラフィーってよく分からぬけど、こんな感じかなあ～と描きました。細かいツブツブでエネルギーがあふれるのを描いているとどんどんアイデアがわいてきました。〆切に間に合わせるのが大変でした。がんばった。

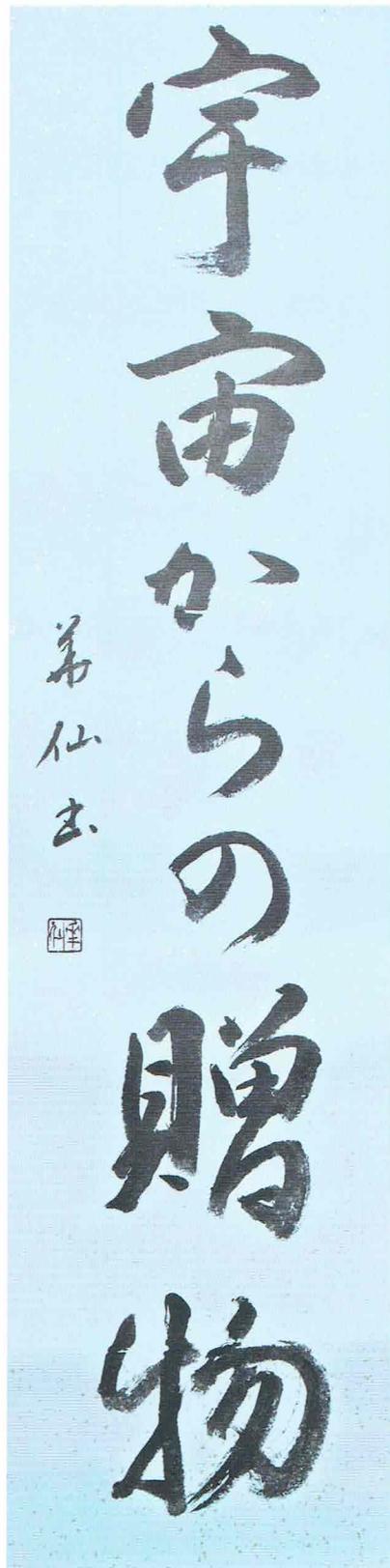


「火山とミュオン」 油彩画 / F10 H45.5cm×W53.0cm

早瀬 ゆりあ

ミュオグラフィで見た火山の内部を力強く表現しました。噴火している様子も描きました。

Yuria Hayase



「宇宙からの贈物」  
書(条幅) / H131.5cm×W34.7cm

角 谷 華 仙  
K a s e n S u m i y a

約100万個ものミュオンが 眠っている間に体を通り抜けていると知った時の驚き！  
目には見えないけれど確かに存在する「宇宙からの贈物」、ミュオン。  
無限の宇宙に星を散りばめたような書道紙にわかりやすい行書体で書いてみました。



「ミュオグラフイ宇宙クッキー」 クッキー

もりともえ  
Tomoe Mori

宇宙からの贈り物 ミュオン 宇宙から地球に絶えず降り注ぎ、今も私たちの体をも通り抜けている膨大な数の宇宙の素粒子ミュオン。私達の命を守る可能性をもたらしてくれる宇宙からの贈り物ミュオンをお菓子で表現してみました。



「宇宙からの贈物」 油彩画 / F20 H72.7cm×W60.6cm

畠 美 沙 樹  
Misaki Hata

ミュオグラフィに用いられるミュオンは宇宙から降り注ぎ、通常では見えない巨大物体の中の情報を私たちのもとにも届けられます。  
まさに、「宇宙からの贈物」です。



「解-SOLUTION-」 油彩画 / F20 H72.7cm×W60.6cm

仁 司 朋 花  
Tomoka Nishi

この絵は、今まで誰にも解くことができなかつたものが、宇宙から降つてくるミュオンがカギとなって、解き放たれていく様子を表現しています。もしかすると今まで誰も知らなかつた新しい部屋を見つけることができるかもしれない、という無限大な可能性やワクワク感を出すために、カラフルなミュオンにしてみました。



「\_affections」 油彩画 / F30 H91.0cm×W72.7cm

村岡あづ美  
Azumi Muraoka

宇宙からやってくるミュオン。ミュオンたちはミュオグラフィーの装置を通して、私達がまだ知らない世界のことを教えてくれる。地球に降り注ぐのはただの物質ではなくて、慈愛に満ちた優しさ。



「ミュオンと古墳」 油彩画 / F20 H60.6cm×W72.7cm

大曾初音  
Hatsune Oso

宇宙から降ってくるミュオンを計測し、日本や世界の古墳、火山、ピラミッドや巨大な物体を透視し、中の構造や形状がどのようにになっているのかを調査、発見する、ミュオグラフィを絵にしました。今回は日本にある世界三大墳墓の一つに着目し描きました。



「1 million overnight」 油彩画 / F20 H60.6cm×W72.7cm

大塚 晴乃  
Hareno Otsuka

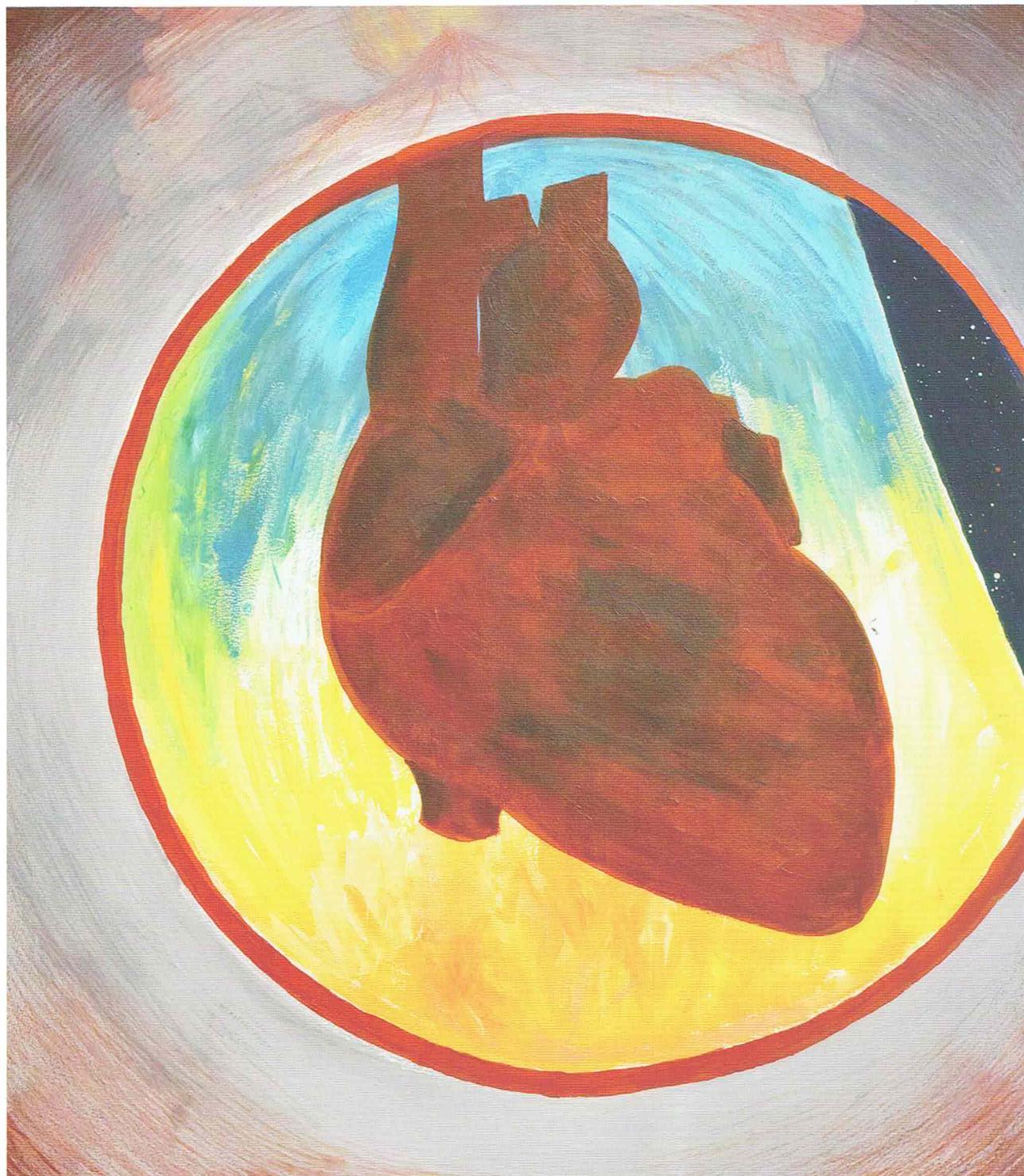
ミュオンの「一晩に1,000,000個、あなたの身体を通り抜ける」という性質に着想を得てこの絵を作りました。ミュオンは肉眼では目視することはできませんが、ミュオンに秘められた無限の可能性を感じていただけたらと思います。



「目には見えなくとも」 油彩画 / F15 H53.0cm×W65.0cm

小阪美咲  
Misaki Kosaka

ミュオンのモノを透過する性質に着目して描きました。普通目に見えないですが、それが見えるようになったらどんな世界になるのか、実際に透過された画像を参考にし、そこに自分の想像を入れ混ぜて表現しています。実際には見えないけれど、現実には起こっている、しかしどこか現実味のない現象、そういう意味を込めてあえて幻想的な空間にしています。



「MU\_N」 油彩画 / F20 H72.7cm×W60.6cm

西口桃  
Momo Nishiguchi

この絵はMU\_O\_N物体の透過をイメージして描いたものです。この絵で、透過して見ているものは2つあり、一つは絵の主体となっているマグマモチーフのもの。もう一つは噴煙を透過して見る宇宙です。マグマモチーフのものは元々の役割としても全体に液体を送り出す役割をしており、それになぞって溶岩を送り出す部位としてこの中心部を描きました。

## 「宇宙からの贈物」 -ミュオグラフィアート展-

---

表紙題字：角谷華仙「宇宙からの贈物」

監修：中島裕司

角谷賢二

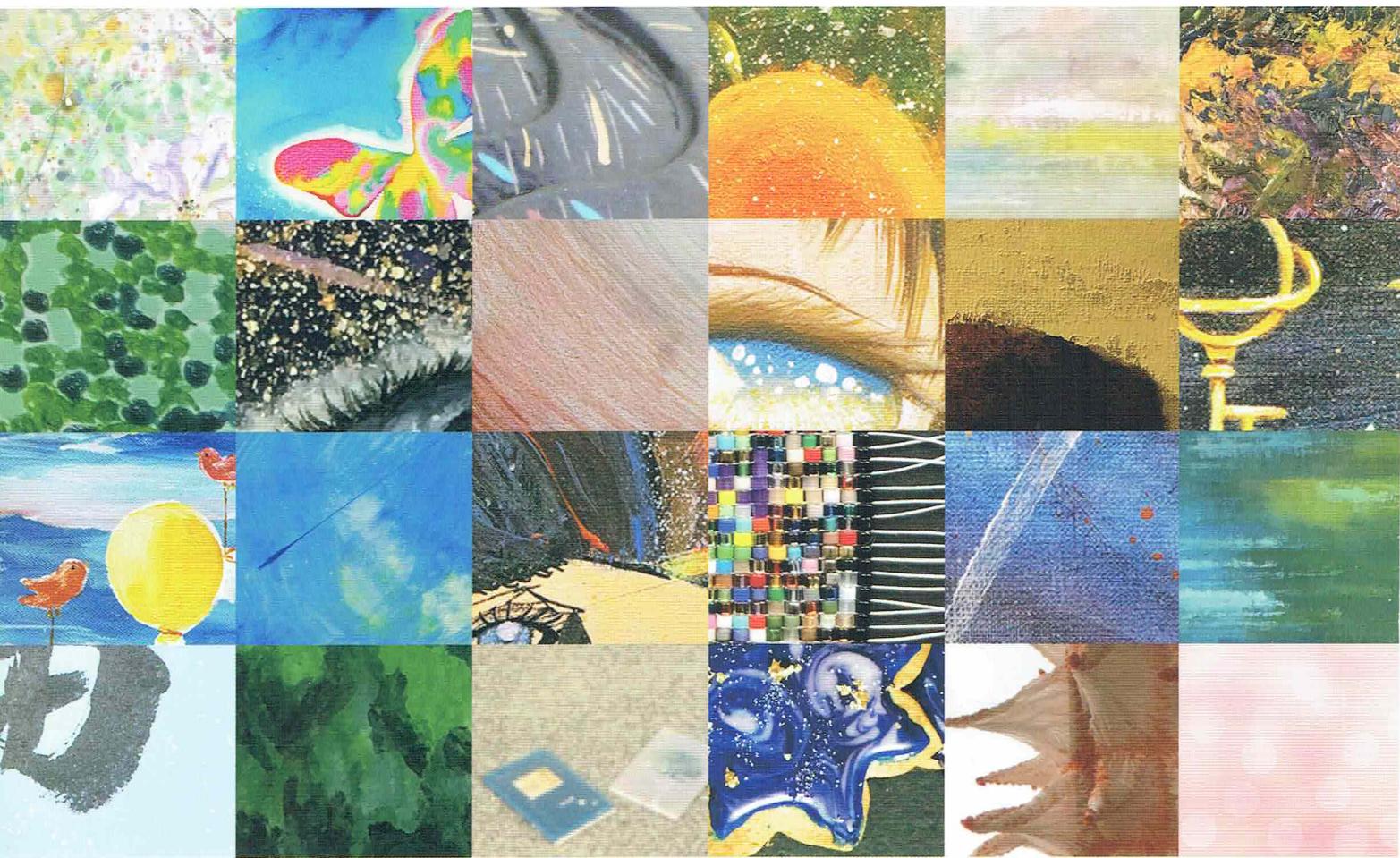
装幀：橋本浩子

主催：関西大学ミュオグラフィアートプロジェクト

協力：東京大学地震研究所

多摩美術大学美術館

関西ハンガリー交流協会



価格 500円(税込)